続 お薬よもやま話

<22>

プラセボ

薬の効き目や安全性を確かめるために、薬効成分の入った本物の薬と、薬効成分を含まない「プラセボ」と呼ばれる〝偽薬〟（ぎやく）とを使います。

例えば、錠剤の形をした薬には、効き目の本体である少量の薬効成分と、成形を良くするために使う乳糖やでんぷんのような成分（賦形剤という）が含まれていますが、偽薬は賦形剤ばかりからできていて、外見は本物の薬と見分けがつかないように作られています。だから偽薬には当然、治療効果はありません。

しかし、病気のとき、「薬を飲んだだけでもう大丈夫」と安心したというような経験はありませんか？

有効成分が含まれていない薬をそれと知らずに飲んだとしても、薬を飲んだと思うだけで心理的作用が働き、効果を表すということがあります。このような効果を専門的には〝プラセボ効果〟と呼んでいます。

体調が悪い時に医師に診てもらい、特別な治療や投薬を受けていないのに心理作用が働いて安心し、症状が軽減する効果も〝プラセボ効果〟の一種です。

新しい薬の効き目を確かめるためには、このようなプラセボ効果を排除するために、本物の薬とプラセボの両方を被験者にはそれと分からないようにして用いることによってデータを得る必要があります。

同じような「安心効果」は薬の世界以外でも見られます。

例えば、旅行を終えて自宅に帰ってくると「家がやっぱり一番エエな」とつぶやいてみたり、長い出張から帰って奥さんや家族の顔を見るとホッとするものですが、これも心理的な安心効果の最たるものと言えるでしょう。